



医学部だより

第31号

2015.10.1



次期中期計画を目指して不断の改革を

医学部長 苛原 稔

今年第2期中期計画の最終年で、来年から第3期を迎えます。第3期の重要性は教職員の共通の意識となっていますが、医学部でも第3期への助走が始まっています。

直近6年の第2期に国立大学の環境は大きく変化しました。特に、①大学運営の責任者として学長の位置付けを明確にし、そのガバナンスの強化により、今まで以上に自己責任による大学運営を行わねばならなくなったこと、②理系偏重との批判はあるものの、学部再編を通して税金を投入するに見合う成果を要求されていること、③86国立大学を1) 地域貢献を主体とする大学、2) 全国的にみて特徴ある学生養成を行う大学、3) 国際的に高い評価を得ることを目指す大学の3領域に分け、各領域に応じた自助努力を強く求められるようになること等、国立大学の存在意義や運営体制が大きく変わってきました。そして、この改革を基礎に第3期には大学間競争が激化し、最終的には大学統合への道が明確になるでしょう。

さて、徳島大学の第3期の課題はどうでしょうか。もちろん6年後には今まで以上に評価される大学であるために教職員が一丸となった取り組みが必要であることは言うまでもありません。その上で、学長ガバナンス強化の体制はほぼ整備されたので、如何にガバナンス強化の利点を発展に繋げるかが課題になります。学長のトップダウンを効果的にするためには、逆説的ではありますが、現場の意見をボトムアップするシステムの構築が重要です。現場が学長の方針を十分理解して動くとともに、現場の必要性を学長が知る仕組みが欠かせないと思います。上下の意識の十分な疎通が成功の鍵ではないでしょうか。

また、常三島キャンパスの総合科学部と工学部が再編され、新総合科学部、理工学部、生物資源産業学部が来年4月に誕生します。生物資源産業学部は農学的な一次産業から食品流通などの三次産業までの幅広い人材養成を目的としています。また、理工学部や新総合科学部でも、今までの領域に捉われ

ない新しい分野の開拓が期待されています。これらの3学部と医学部のコラボレーションはとても大事であり、医学部がこれから発展していくためには、常三島3学部との連携強化が急がれます。

国立大学の3分化では徳島大学は地域貢献を主体とする大学を選びました。もちろん、研究については国際的な発展が求められるわけですので、従来から進めてきた国際化も併せて進めていく必要があります。国際化と地域貢献の両立を目指した大学運営を行うことになるでしょう。

そこで、このような大学全体の指針を踏まえ、医学部の将来像をリニューアルしていくことが危急の課題になります。3学科それぞれが国際化と地域貢献を両立しながら大学発展のエンジンであり続けるためにどのような自己改革が必要か考えねばなりません。それぞれに課題がありそれぞれが発展への分岐点にあります。この意識を持って不断に運営改革を進めていきたいと思ひます。

さて、医学科においては、来年、本学が主幹で西日本医科学生総合体育大会（通称西医体）が開催されます。学生主体の大会ですが、成功裏に終了できるように支援したいと思ひます。今年の総合順位では半分程度の位置まで上昇してきました。特に、サッカー部と柔道部は西医体と全全体の両方で優勝、また、弓道部女子も西医体で準優勝しました。選手たちの頑張りや関係者の努力に敬意を表します。併せて、サッカー部は天皇杯徳島県予選で勝つ快挙を起こし、医学部運動部全体の意識を高めてくれました。この調子で、来年の西医体で活躍する運動部が増えて欲しいと思ひます。

最後になりましたが、医学部を取り巻く環境は厳しいものがありますが、学生が生き活きとしたキャンパスライフを送れるように日々改革をしていきます。どうぞ、ご支援を賜りますようお願いいたします。

目次

CONTENTS

巻頭言	1	徳島医学会報告	10
海外留学体験記	2	受賞者紹介	10
医学部行事予定	4	平成27年度6年生OSCE成績優秀者	11
モンゴル国立医科大学		第67回西日本医科学生総合体育大会	11
—徳島大学交流10周年記念会の大成功を祝して—	5	学遊抄	12
寄附講座「地域医療人材育成分野」紹介	6	白衣授与・Student Doctor認定証授与式	12
オープンキャンパス	7	数字で見る医学部	13
「クリニカルアナトミー教育・研究センター」の		新任教職員あいさつ	14
設置・運営・活動について	8	新任准教授紹介	14
学生委員会から	9	編集後記	14
教務委員会から	9		

海外留学体験記

テキサス大学 サマー・リサーチ・プログラム 報告

医学科4年 西條 早希

6月24日から約2か月間、テキサス大学ヒューストンヘルスサイエンスセンターでのSummer Research Programに参加させていただきました。私はInternal medicine, Cardiology, Dr. Taegtmeierの研究室に配属され、心肥大や心不全の病因



となるタンパク質についての研究を行いました。実験も世間話も全て英語という環境は、最初はとても緊張しましたが、先生方はみんな親切で、徐々に慣れることができました。ラボミーティングでは学生を含め活発な議論が行われ、非常に刺激的でした。また、研究室のメンバーの誕生日には一緒にパーティーをしたり、週末には先生のご自宅に遊びに行ったりと、研究以外の面でも充実した日々を送ることができました。

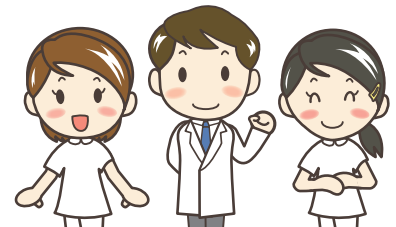
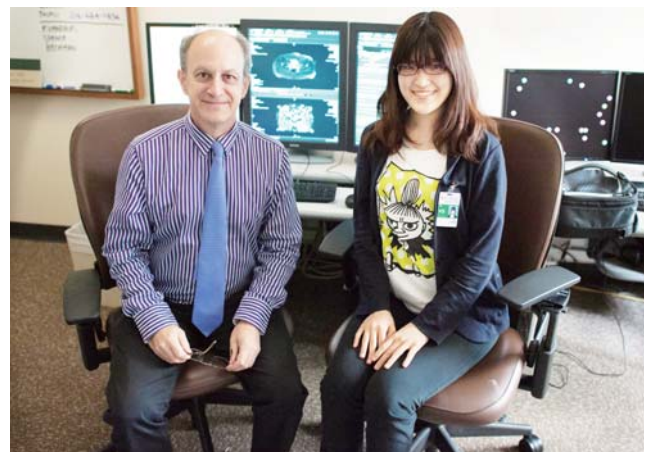
私にとって今回の留学は初めての海外経験で、日本や徳島を客観的な視点で見つめられ、そして自分の将来を考える良い機会になりました。2か月という短い期間でしたが、多くの方と出会い、様々な経験ができたことを非常に嬉しく思います。

最後になりましたが、このような貴重な機会を与えてくださった苛原医学部長、赤池教授、勢井教授、国際課村澤コーディネーターをはじめ、サポートしてくださった全ての方々に厚く御礼申し上げます。

医学科4年 東 沙葵

この夏約2ヶ月間、テキサス大学ヘルスサイエンスセンターヒューストン校のサマーリサーチプログラムに参加させて頂きました。私は放射線科のDr. Kramerの下で硬膜静脈洞と内頸静脈の狭窄の頭蓋内圧への影響に関する研究と、Vision Impairment and Intracranial Pressure (VIIP) でみられるintracranial fluid hydrodynamicsの変化についての研究を行いました。結果や解釈についてメンターの先生と英語で議論することは難しく、しかし大変勉強になりました。研究以外にもカンファレンスへの参加や病院の施設、国立宇宙生物医学研究所(NSBRI)の見学、週末はホームパーティーに招待して頂いたりと様々な体験をするなかで見聞を広め、非常に多くを学ぶことが出来る留学となりました。

最後になりましたが、今回の留学でお世話になりました苛原医学部長をはじめ諸先生方、国際課の村澤コーディネーター、皆様に厚く御礼申し上げます。



医学科4年 山崎 藍

6月24日から約二か月、テキサス大学ヒューストンヘルスサイエンスセンターでのサマーリサーチプログラムに参加させていただきました。私は、病理学分野のDr. Actorのラボでラクトフェリンが結核菌による肺の病理形成に与える影響を観察し、マクロファージの表現型やサイトカインの量を評価する研究をさせていただきました。直接指導をしてくださった、Dr. Hwangにはラボ内だけでなく、生活面でも多くのアドバイスや協力をいただき、非常に充実した体験ができました。また、このサマーリサーチプログラムには、上海大学からの医学生、アメリカ国内の医学生とこれから医学科への出願を控えている学部生も参加していました。彼らと接することで自分の力不足を痛感し、これから自分は何をしなければ

ならないかということを考える良い機会になりました。最後になりましたが、今回このような貴重な機会を与えていただきました苛原医学部長をはじめとする諸先生方に厚く御礼を申し上げます。



ハノーバー医科大学

交換留学プログラム

報告

医学科4年 金井 佑亮

初夏に六週間、ドイツのハノーバー医科大学で交換留学生として臨床実習させて頂く機会を得ました。自分にとって初めてで、言葉も分からない環境での臨床実習でしたが、多くのことを学ぶことができました。

Neurologyの実習では回診や検査に参加するのがメインでした。毎日間近に患者さんに接し、時に問診や検査を実践することで、医師の側からだけでなく患者さんの立場からみた病気というものも少しずつ理解できるようになった気がします。またNeurosurgeryの実習では毎日いくつかの手術を見学し、豊富な症例を目にしました。最後の週には助手として手術に参加して、出来る範囲の補助や縫合などをする貴重な機会を得ました。臨床の場に立ってこういったことを日々経験するなかで、医療に対する視点やプロセスの多様さを知ると同時に、医療に携わる人びとの背負う責任や、得られる喜びを垣間見ることができました。残りの大学生活で、ハノーバーで

感じ、考えたことを確かな形に結実させていけたらと思います。

最後に医学部長の苛原稔先生をはじめ、このような貴重な機会を与えて下さった皆様に厚く御礼を申し上げます。ありがとうございました。



医学科5年 水口 誠人

交換留学プログラムを利用して四週間、ドイツのハノーバー医科大学の神経内科で学外実習をさせていただきました。今回は一般病棟、神経生理検査部、SCU、神経救急外来を見学しました。貴重な症例や、日本と異なる治療法を経験するこ



とができ、非常に充実した日々を過ごすことができました。留学中最も印象に残ったのは、ドイツの医学教育の制度やカリキュラムです。ドイツでは三年生から病棟実習がスタートし、ベッドサイドで多くの臨床手技を身につけていきます。六年生の時点では日本の研修医と同等の技術が求められます。こういった違いは、ドイツの医学教育が「臨床的であること」を重要視しているためです。その他にも国家試験が3回もあったり、大半の学生が卒業までにPhDを取得したりと、日本とは違うことばかりで驚かされました。

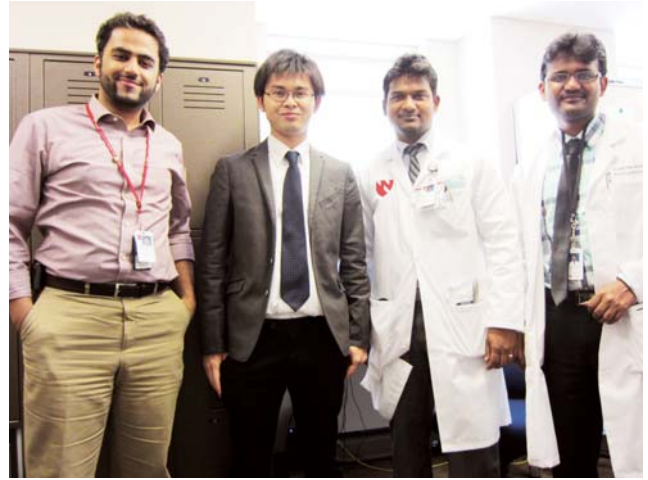
海外旅行こそしたことはあれ、医学生として公的な立場で留学するのは、初めてのことで出発前は不安でいっぱいでした。しかし、今回の留学を通じて外国の文化や医療のあり方を直接体験できましたし、現地の学生との交流は私にとって大きな刺激となりました。留学で考えたこと、感じたことをこれからの自身に還元していければと思います。このような素晴らしい機会を与えてくださった諸先生方、関係者の皆様、本当にありがとうございました。

ネブラスカ大学 臨床実習クリニカル・クラークシップ 選択実習Ⅰ

報告

医学科6年 下園恒明

5月の4週間、米国ネブラスカ大学神経内科の Observership program に参加させていただきました。このプログラムは米国の病院での診療現場を見学できるプログラムです。毎日の回診に同行し、指導医の洗練された診察や、レジデントへの教育の仕方を見ることができました。外来では1人の患者さんに1時間かけることも珍しくなく、医師と患者さんがとてもフレンドリーに会話しているのが印象的でした。また、Grand Round や Noon Conference など、レジデント向けの教育カンファレンスも豊富にありました。日米での診療スタイルの違い、そもそもの文化の違いに戸惑うことばかりでしたが、日々新たな発見がありました。また、疾患についてのプレゼンテーションをさせてほしいと指導医にお願いしたところ快諾してくださり、期間中に2度、プレゼンができました。米国であまり見られない疾患（もやもや病）についてのプレゼンが好評でした。米国では積極的に自らをアピールしていかないと評価されない一方、チャレンジを快く歓迎してくれる文化が存在するのを感じました。今後も多くの学生が海外臨床実習を経験できればと思います。



最後になりましたが今回このような貴重な機会を与えてくださった梶教授をはじめ、神経内科の先生方にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。



医学部行事予定 (平成27年10月～平成28年3月)

- 10月1日(木) 後期授業開始
- 10月9日(金) 解剖体慰霊祭
- 10月31日(土)～11月1日(日) 大学祭
- 11月2日(月) 徳島大学開学記念日
- 11月2日(月) 第110回医師国家試験願書受付 (11月30日(月)まで)
試験日：2月6日(土)～8日(月)
- 11月20日(金) 第99回助産師国家試験願書受付 (12月11日(金)まで)
試験日：2月17日(水)
- 第102回保健師国家試験願書受付 (12月11日(金)まで)
試験日：2月16日(火)
- 第105回看護師国家試験願書受付 (12月11日(金)まで)
試験日：2月14日(日)
- 12月15日(火) 第68回診療放射線技師国家試験願書受付 (1月5日(火)まで)
試験日：2月25日(水)
- 第62回臨床検査技師国家試験願書受付 (1月5日(火)まで)
試験日：2月24日(水)
- 12月25日(金) 冬季休業 (1月6日(水)まで)

28年

- 1月上旬 第30回管理栄養士国家試験願書受付 (1月中旬まで)
試験日：3月下旬
- 1月16日(土) 大学入試センター試験 (17日(日)まで)
- 2月25日(木)～2月26日(金)
入学試験 (前期日程)
- 3月12日(土) 入学試験 (後期日程)
- 3月18日(金) 医師国家試験合格発表
- 3月23日(水) 卒業式・大学院修了式
- 3月25日(金)～3月31日(木)
学年末休業
- 3月25日(金) 助産師、保健師及び看護師各国家試験合格発表
- 3月29日(火) 診療放射線技師及び臨床検査技師国家試験の合格発表
- *管理栄養士国家試験の合格発表は、5月上旬



モンゴル国立医科大学-徳島大学 交流10周年記念会の大成功を祝して

医学部長補佐(渉外(国際)関係担当) 島田 光生

この度、8月1日にモンゴル国立医科大学-徳島大学 交流10周年記念会が大々的に執り行われ、成功裏に終了しました。モンゴル国立医科大学 (Mongolian National University of Medical Sciences: MNUMS) からは、Batbaatar Gunchin 学長、Sumberzul Nyamjav 副学長、Amarsaikhan Bazar 副学長をはじめ8人の役員その他、3人の Faculty member そして、6人の学生や学長のお嬢さんが参加されました。今回のように多くの方がモンゴルから来られるのは初めてのことだそうです。

徳島大学からは香川学長、荻原医学部長をはじめ、細井副学長(国際センター長)、青野前学長など多くの方が参加されました。荻原医学部長の開会の言葉に始まり、香川学長からは2005年に医学部間の学術交流が始まり2007年に現在の大学間交流に発展し2012年には徳島大学卒業留学生同窓会 (Mongolia Association of the University of Tokushima Alumni: MAUTA) が設立されてきた経緯と今後更なる交流の深化が期待されることのご挨拶、細井副学長からはこれまでに総勢28人が博士課程を修了し、18人は現在在学中でありこれは徳島大学の中で中国とマレーシアに次ぐ大きな勢力で今後益々その絆が強くなることを祈念しますことのご挨拶、MNUMS 学長と副学長からのお礼を込めたご挨拶の後、これまでの「交流を振り返って」、青野前学長、曾根元医学部長(スライド出演)や谷特任教授(スライド出演)により、交流の馴れ初めから、大学間協定の調印の頃の話、玉置前医学部長や Bayanmunkh

Battulga MNUMS 徳島大学卒業留学生同窓会会長からの交流の裏話や、楽しい思い出が話され、村澤国際コーディネータから経時(年)的な交流の記録が詳細に報告されました。中でも、西野徳島大学/MNUMS 名誉教授が、モンゴルでの歯科診療支援を通じた交流が大きく日本/モンゴルで取り上げられていること、小児歯科の教科書をモンゴル語で訳し出版されたこと(モンゴル人のモンゴル人による、モンゴル人のためのモンゴル語による初めての教科書)が賞讃され、西野先生が壇上に上がって交流について話された時には、この日の一番の拍手が湧き起こりました。その後記念品の交換が行われ(写真1)、記念会は極めて友好的で楽しい雰囲気の中で終了しました。(写真2)



▲写真1
交流10周年記念会記念品交換
香川学長、Batbaatar学長、
荻原医学部長、
Munkhbayarlakh医学部長
(左から)

▲写真2
交流10周年記念会集合写真
西野名誉教授、荻原医学部長、
青野前学長、香川学長、
Batbaatar学長、Amarsaikhan副学長、
Sumberzul副学長、
Munkhbayarlakh医学部長、
Tuvshinjargal薬学部長
(前列左から)



10周年記念会に先立ち、モンゴルからのお客様は前日の7月31日(金)に徳島にられました。Batbaatar 学長と Amarsaikhan 副学長は東京経由でお昼頃に着かれ、他の方々は関西国際空港経由で夜遅くの到着となりました。学長は現在 JICA の資金で、MNUMS 附属病院を建設する最終段階(設計/建築業者の入札)にあるため、午後、病院情報センターで情報システムの説明に興味深くまた熱心に受けていました。夜は医学部長主催の夕食会が開かれ、和やかな雰囲気の中で歓談、食事を楽しまれておられました。(写真3)



▲写真3 医学部長主催夕食会
Amarsaikhan副学長、
Batbaatar学長、香川学長、
西野名誉教授(前列左から)

出来たてほやほやの新外来棟(院長室や安野光雄氏の絵画がある管理棟)(写真4)、検査部、放射線部などを熱心に視察されていました。



▲写真4 徳島大学病院新外来棟見学

その後、ホテルクレメントに場所を移し、学長主催のレセプションが行われました。両大学からの挨拶の後で、記念品の交換が行われました。また徳島大学からの参加者全員にも記念品を頂きました。モンゴル学生が伝統衣装を身にまとってのフルート演奏や、日本の歌の披露がありました。特にホーム



▲写真5 モンゴルの伝統舞踊

ミーといわれるモンゴル伝統の喉を使った発声による歌は初めて見た日本の先生方も多く大変興味深く鑑賞しました。また

女子学生によるモンゴルの伝統舞踊(写真5)も行われました。その後は徳島大学栄養学連による阿波踊り(写真6)が行われ、最後はモンゴル学長先生を含めて、会場の先生方全員が阿波踊りに参加し大変盛り上がりしました。各テーブルではモンゴルのウォッカを飲みながら、楽しい雰囲気の中時間が経つのも忘れて交流に花が咲いていました。

これまでMNUMSと徳島大学の交流は極めて順風満帆にきていますし、またこれから次の10年も、今まで以上に両大学の絆がより強固になり、日本のでっぺんの素晴らしい国際交流に発展することを確信いたしました。



写真6 ▶
徳島大学栄養学連による阿波踊り

寄附講座「地域医療人材育成分野」紹介

地域医療人材育成分野 特任教授 川人 伸次
地域医療人材育成分野 特任教授 谷 洋江

地域医療人材育成分野は、愛媛県公立学校共済組合四国中央病院の診療支援を中心に地域医療に貢献し、更に臨床に還元できる研究と医学生・看護学生・若手医師・看護師等の教育を行い、優秀な人材育成に寄与することを目標とし、徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部(現:医歯薬学研究部)内に平成27年2月1日付けで開設されました。医学領域から3名(麻酔科医2名、眼科医1名)、保健学領域から1名の教員が所属し、計4名で活動を開始しました。そして、平成27年4月1日より看護職1名の教員が増員されました。

医学領域では四国中央病院内に徳島大学病院サテライトセンターを設置し、地域中核病院として医療の質の向上を目指して活動を開始しました。麻酔科と眼科で診療支援を行っています。手術症例数(特に眼科手術)は著明に増加しています。更に、効率的な手術室運営と術前・術後も含む周術期の一貫した患者支援を目的として、周術期管理センターを開設します。集中治療・ペインクリニック・緩和医療への臨床支援も計画しています。

保健学領域では、看護職の資質向上のための教育や学生実習指導等の充実を目指して医療人材を一体的に養成するためのプログラム研究等を行っています。また、これまで行ってきた徳島県内での子どもの虐待予防活動に関する研究を活かして、四国中央病院に子どもの虐待・DV対策委員会を設置し、ハイリスク家族のスクリーニングおよび院内支援・地域との連携支援を開始しました。4月からは更に助産師としての活動も加わり、より充実した支援内容となりました。

研究も私たちの重要な使命であり、基礎・臨床研究を積極的に行っています。現在進行中の主な研究プロジェクトは、1)カリウムチャンネルに関連した麻酔薬による血管機能保護効果の研究、2)経食道心エコー法を用いた先天性心疾患患者の術中心機能解析、3)人工臓臓を用いた術中強化インスリン療法の確立、4)低温反応性アルブミン除去アフエレーシス療法の開発、5)I型糖尿病患者と家族への看護援助、6)子

どもの虐待予防のための育児期の家族の支援、等です。

地域啓蒙活動に関しては、各種シミュレーション機器を導入し、四国中央病院内にスキルスラボが整いました。今後、院内・院外問わず、救命救急・蘇生法の講習会等に広く役立つたいと考えています。

地域医療人材育成分野は、1つの分野に複数の職種・領域が含まれる新しい形の分野です。医学科・医科栄養学科・保健学科の3学科を有する徳島大学医学部の特色を生かした取り組みで、全国的にもあまり例がありません。一般的に「地域医療」というと、プライマリ・ケア、家庭医療学、総合診療医学を中心に内科・外科といったメジャー科が中心とされていますが、地域中核病院ではマイナー科医師・看護職の人材不足も深刻で、診療に支障をきたしています。私たちはそれぞれの専門性を生かして、各専門領域に特化した地域医療貢献を目指しています。



公立学校共済組合四国中央病院

オープン

Open Campus

キャンパス

医
学
科

8月6日の午後、大塚講堂にて医学科オープンキャンパスが開催されました。高校生251名（徳島県134名、四国他県31名、近畿57名など）と保護者161名にご参加いただきました。苛原医学部長、安友医学科長の挨拶の後、医学科紹介、2つのミニ講義が行われました。ミニ講義では、疾患プロテオゲノム研究センターゲノム機能分野の岡崎教授と呼吸器・膠原病内科学の西岡教授により、それぞれ基礎・臨床の立場から、ご自身の歩んで来られた道について研究成果を交えてお話があり、参加者は非常に熱心に耳を傾けていました。その後、高校生は24グループに分かれ、医学科学生のエスコートにより、疾患酵素学研究センター、疾患プロテオゲノム研究センター、医療教育開発センター、先端医療研究部門、医学科の各研究室（基礎系11・臨床系13）の施設見学を行いました。保護者には、アドミッションセンターの植野特任准教授により入試説明会が行われました。皮膚科には11名が訪れ、設備見学の後、模擬カンファレンス、ダーモスコピーを用いた色素性病変の観察、若手教員との懇談

を行いました。今年は1グループの人数が10名余りで、比較的スムーズかつ密に対応できたように思います。アンケートでは、研究に興味を持った、普段できない見えないことを経験した、是非入学したいなど、良かったという感想を多くいただきました。半日の体験を今後の学習のモチベーションにつなげていただければ幸いです。（久保宜明）



医
科
栄
養
学
科

平成27年8月6日午前に医科栄養学科のオープンキャンパスを開催いたしました。大塚講堂にて、二川健学科長の挨拶、その後、入試委員による平成28年度入学者選抜の概要、入学者状況、医科栄養学科卒業生の就職状況の説明、および、選抜方法等に関して、説明が行なわれました。次に、疾患治療栄養学分野濱田教授からのミニ講義「医科栄養学科とは」、さらに、食品機能学分野の河合准教授による、ミニ講義「食品学研究のおもしろさ」について、講演が行われました。約441名の受験生、保護者、および教員が、徳島県を中心に、東京から沖縄まで、全国から参加いただきました。その後、参加学生は、医科栄養学科棟に移動し、栄養学の現場を見学して、各研究室で研究説明が行なわれました。医科栄養学科8分野が、それぞれの研究内容に関して説明し、その後、質疑応答が行なわれ、最後にアンケート調査が実施されました。アンケートでは、「医科栄養学」、「臨床栄養学」などの充実した研究教育機関であることが、深く印象に残ったようです。さらに、本学科が、従来の「調理や給食」などを中心とした栄養学ではなく、「医学教育」を

基盤にした栄養学の実践の場であると実感した、との意見が多く聞かれました。一方、父兄の皆様には、保護者向け入試説明会が開催され、徳島大学アドミッションオフィスから、医科栄養学科の入試方法の特徴や、学生生活、就職先等の説明がありました。今後も、ミニ講義などを、いっそう充実させて、参加者の希望に応える努力が必要と考えます。当日、ご協力いただきました関係者に、深謝申し上げます。（宮本賢一）



医科栄養学科オープンキャンパス；学科棟見学の風景

保
健
学
科

全国的に猛暑日が続く中、8月7日（金曜日）午後保健学科のオープンキャンパスは予定通り開催されました。大塚講堂での学科長の挨拶、入試委員長から入学試験の概要説明が行われた後、各専攻に分かれ、大塚講堂の他、保健学科棟、青藍講堂で専攻別説明が行われました。猛暑にもかかわらず、当日の出席者は、看護学専攻193名（保護者63名）、放射線技術科学専攻85名（保護者63名）、検査技術

科学専攻46名（保護者26名）でした。徳島県内だけではなく、近畿・中国地方など県外からも参加がありました。

それぞれの専攻で工夫をこらして、施設見学、専攻別相談会、体験学習が行われました。看護学専攻では、体験学習に約70名、病院見学に約30名の高校生が参加し、参加できなかった高校生のために、大学の施設や入学後に学ぶ学習内容や実習風景を編集したDVDをみていただき理解を深めてもらいました。今年は年齢の近い保健学科の学生にたくさん参加してもらい、相談会場では入学後の学生生活や受験勉強について積極的に話をしてもらいました。教員への質問よりも学生への質問に人気があったのが印象的でした。また、体験実習では聴診、血圧測定、手洗い、包帯実習、妊婦体験、おむつ交換、モデル人形による術後ケア、健康教室などを体験してもらいました。他の専攻においてもそれぞれ工夫をこらして専攻の特色をアピールし、参加者にとって有意義な半日を過ごすことができました。高校1年生や2年生の参加が多く、将来学ぶべき内容や職業観について理解してもらったと思います。高校生目線でのオープンキャンパスを目指し、次のオープンキャンパスにつなげたいと思います。（安井敏之）



「クリニカルアナトミー教育・研究センター」の設置・運営・活動について

クリニカルアナトミー教育・研究センター長 金山博臣

近年、社会的要望として高度で安心・安全な低侵襲医療が求められています。腹腔鏡手術や内視鏡手術など高度で先進的な様々な手術手技が開発されていますが、安全で確実な医療技術を習得するためにはトレーニングが必須です。シミュレーターや動物を用いてトレーニングを積むことが必要ですが、高度化した医療技術の習得にはさらに生体に近いトレーニング環境が要求されるようになってきました。海外では未固定遺体を用いたサージカルトレーニングや技術開発が普及していますが、日本においてはご遺体を用いた手術手技の修練や医療技術の開発は困難な状況でした。そのような状況を改善するため、平成24年に日本外科学会・日本解剖学会から「臨床医学の教育及び研究における死体解剖のガイドライン」が公表され、手術手技研修や先進的な医療技術の開発などの目

的でご遺体を使用できるようになりました。

徳島大学病院では未固定遺体を用いたサージカルトレーニングや医学・歯学研究に対応できる施設の構築を目指して準備を進めてきましたが、平成26年8月1日に総合研究棟の1階にクリニカルアナトミーラボ(CAL)が完成しました(図1)。そして、CALを拠点に教育・研究を行うクリニカルアナトミー教育・研究センターが設置され、医師・歯科医師が未固定遺体を用いてサージカルトレーニングや医学研究を行うことが可能になりました。

CALの運営に関しては、解剖学教室の協力のもと、クリニカルアナトミー教育・研究センター運営委員会が管理しています。運営委員会では、CALの管理運営の基本方針、利用・安全管理に関すること、教育・研究計画に関すること、日本



総合研究棟(医学系)全景

【クリニカルアナトミーラボ(総合研究棟1階)設備概要】

御遺体保管用冷蔵庫(2体用)	1台	四肢用MRI	1台
御遺体保管用冷蔵庫(5体用)	4台	回診用X線装置	1台
手術台	2台	腹腔鏡装置	一式
マルチスライスCT	1台	ドラフト装置	1台

図1 クリニカルアナトミーラボ(総合研究棟1階)

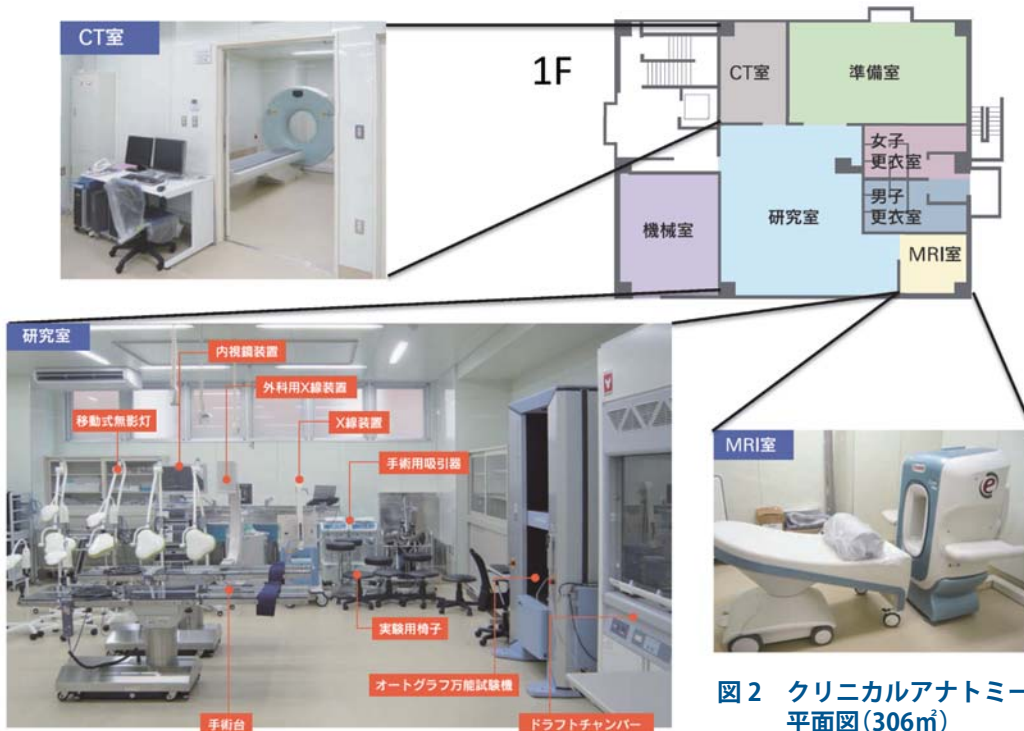


図2 クリニカルアナトミーラボ平面図(306㎡)

外科学会ガイドライン検討委員会への報告、教育・研究内容の公開、その他管理運営に関する重要な事項について対応しています。ご遺体を用いたサージカルトレーニングや医学・歯学研究を実施するにあたっては、関連する法律や倫理についての知識・理解が必須です。また、各トレーニングや研究は臨床研究の一環として実施します。そのため、CALを利用するためにはセンターが開催するCAL講習会を受講するとともに、徳島大学病院の臨床試験研修セミナーを受講する必要があります。ご遺体に対する礼を失することなく、安全で適切なトレーニング・研究の実施が求められます。

このCALには、種々の機器を整備しています。X線透視装置、CT、四肢用MRI、腹腔鏡手術機器等を用意し、様々なサージカルトレーニングや医学研究に対応できるようになっています(図2)。昨年(2014)の11月よりトレーニング、研究が実施されており、整形外科においては「未固定遺体を用いた人工関節置換術における軟部バランス研究」、「未固定遺体を用いた経

皮的内視鏡視下腰椎椎間板ヘルニア摘出術(PED: percutaneous endoscopic discectomy)の研究」、「未固定遺体を用いた上肢スポーツ障害の病態解明」、「未固定遺体を用いた骨盤および股関節周囲の血管、神経支配研究」、「未固定遺体を用いた脊椎および脊柱管内への血管研究」、「未固定遺体を用いた脊椎生体力学研究」、泌尿器科では「未固定遺体を用いた献腎摘出術の教育プログラム」が実施され、現在も継続しています。その他、食道・乳腺甲状腺外科、消化器・移植外科、呼吸器外科、耳鼻咽喉科・頭頸部外科、脳神経外科、口腔外科、循環器内科等で多くのプログラムが実施・予定されています。

現在このCALを利用できるのは徳島大学に所属する医師・歯科医師、および大学病院が主導する研修プログラムで研修する医師・歯科医師に限られていますが、今後は、広く学外の医師・歯科医師も利用できるようにする予定です。関連病院の医師・歯科医師のサージカルトレーニングや研究、他大学との連携による人材育成や研究にも発展させていく予定です。

● 学生委員会から ●

学生委員会は、基礎医学系の教授3名、臨床医学系の教授2名、医科栄養学科の教授2名、保健学科の教授又は准教授3名の合計10名の委員で構成されています。役割は、大学院を含めた医学部における学生生活に関わる諸事項を審議して学生の生活を支援するための組織であります。ですから、取り扱う内容は多岐にわたり、修学指導、課外活動、学生団体の指導監督、就職活動、表彰及び懲戒、独立行政法人日本学生支援機構その他奨学金、身分異動、運動場やテニスコート等の施設使用、集会、出版、掲示等、その他学生生活に関することなどがあります。わかりやすく言うと、学生の修学指導を行い、学内外での課外活動を監督し、奨学金貸与の選考や、時には表彰や懲戒に関することも担当する組織です。

平成27年4月から医学部学生委員会の委員長に就任しております。最も頻繁に担当する事はというと、学生証を紛失しましたので再発行をお願いしますとやって来る学生への対応です。学生証は身分を証明するカードであると同時に

医学部学生委員会委員長 鶴尾 吉宏

に、学内のセキュリティに関する情報も入力されており、5年生からは臨床実習が開始するので病棟の出入りには学生証が必須となります。紛失して届けていない場合には、再発行できない事態も生じますので、くれぐれも学生証を紛失しないよう十分に管理してください。

皆さんは学生でありますので、修学することが第一の務めではありますが、将来医療人として社会で仕事を行う使命を受けた者であることを自覚して、大学内はもとより学外においても、正しい倫理観と道徳心を持って常に行動できるように心がけていただきたいと思います。規則を守り、良いマナーで行動することも学生生活を送るには必要なことです。

学生の皆さんに、上記のような事を心がけていただき、有意義でしかも充実した学生生活を送れるように学生委員会が支援いたします。学生生活に関することがありましたら些細な事でもよいので、医学部学務課の学生係までご相談ください。

● 教務委員会から ●

大学病院の新外来棟が完成した後は、ホスピタルロードを含む多目的棟の改修工事が始まります。工事の騒音のため、青藍講堂や臨床講義棟、総合研究棟、保健学C棟等が講義を行うには不適切な環境となるので、順次、学生さんの避難場所を考えています。度重なる改修工事の影響で、なかなか落ち着いた環境が提供できていなかったのが、ようやく昨年、総合研究棟を使用する事が出来るようになった矢先で、再び、迷惑をかけることとなります。学生さん達は、講義室や実習室に最も長く滞在しているので、騒音に限らず、学修に関わる不具合をいち早く察知する立場にあると思います。教員は、自分が担当する講義の間しか講義室にいませんので、気付かないことが多いと思います。学生の皆さんは、気付いたら懇談会の様な機会を待たずに教務委員や医学部学務課の職員に伝えてください。内容によっては、すぐには難しいものもありますが、できるだけ速やかに対応したいと考えています。学修内容についても、端から真剣に取り組んでいない人は論外ですが、教員は、その分野の専門家ばかりです。恐らく、多くの教員にとっては、当たり前すぎて、自分が講義している内容がすつと

医学部教務委員会委員長 西村 明 儒

理解できない学生の気持ちは理解できないと思います。(そうでなければ、本業としていないでしょう。)ですから、もっと積極的に質問してください。もちろん、自分で理解する努力をしてからですが……。

また、医学科では、学生の生の声を聞きその要望を汲み上げるために、年に数回程度、各学年の代表と教員との学生懇談会を開催しています。これまでに様々な要望が出され、可能な限り実現できるよう努力していますが、講義室の空調のように建物に組み込まれた設備のようにかなり大がかりな工事が見込まれるものは、ほとんど不可能ですし、自習室の増設も、まだ対応出来ない状態で、申し訳ない限りです。このような学生さんの要望の実現の可能性が少しでも上がるように、また、これまで余り取り上げられてこなかった教育制度に関わる意見や改革の提案も組上に載せられるように徳島大学医学部医学教育等検討委員会(仮称)の設置を検討しています。これを医学部長の諮問機関として位置づけたいと考えていますので、学生の皆さんには、活発な発言をお願いしたいと思います。

徳島医学会報告

■ 第251回徳島医学会学術集会（平成27年度夏期）

生体防御医学分野 九十九 伸 一

猛暑が続くなか、第251回徳島医学会学術集会は、平成27年8月2日（日）、大塚講堂にて開催された。生体防御医学分野の安友康二教授の開会挨拶に続き、教授就任講演が行われた。疾患病理学分野の常山幸一教授による「メタボリックシンドローム関連肝疾患モデル動物の開発と応用～ヒト病態解析への疾患病理学的アプローチ～」、麻酔・疼痛治療医学分野の田中克哉教授による「周術期のプレコンディショニングの最前線」、学校保健学分野の奥田紀久子教授による「学校保健における教育活動としての一次予防のあり方～喫煙防止教育の実践を通して～」の3講演であった。続いてポスターセッションが行われ、一般演題の46題が3つの会場において発表された。各会場では、今回も非常に活発な議論が行われ、また、徳島医学会賞および若手奨励賞の選考も同時に行われた。

午後のセッションは、第34回徳島医学会賞および第13回若手奨励賞の授賞式から行われた。苜原稔会長から、微生物病原学分野（現 京都大学ウイルス研究所ウイルス病態研究領域）の泉泰輔先生と、那賀町国民健康保険木頭診療所の小幡史明先生に徳島医学会賞が授与された。受賞記念として、泉先生による「光学顕微鏡を用いた単一レトロウイルス可視化技術の樹立」と、小幡先生による「医療過疎地域での急性期脳梗塞患者に対する“drip and ship”法の検討」が講演された。また、川島周県医師会会長から、森本潤先生、大櫛祐一郎先生に、若手奨励賞が授与された。

公開シンポジウム「これからの遺伝診療を考える」では、5人のシンポジストによる講演が行われた。井本逸勢先生（人類遺伝学分野）による遺伝診療の基礎と現状についての講演に続いて、東田好広先生（小児科学分野）による小児における遺伝子異常の検査方法の現状と問題点等について、丹黒章先生（食道乳腺甲状腺外科）による遺伝性乳がんの主な原因遺伝子とその診断・対処・治療について、島田亜紀先生（耳鼻咽喉科・頭頸部外科）による先天性難聴の原因としての遺伝子変異とその診断・治療への応用について、そして最後に苜原稔先生（産科婦人科学分野）による胎児の新しい染色体検査法と着床前遺伝子診断・スクリーニングについての講演

が行われた。どの講演も興味深い内容を簡潔に分かりやすく説明され、聴衆の満足度が高かったように思う。公開シンポジウムに続いて、第35回徳島医学会賞および第14回若手奨励賞の選考結果が発表された。また、それと共に、苜原会長より、徳島大医学部のサッカー部が天皇杯徳島県予選の決勝戦に勝利したことがアナウンスされ、会場には拍手が起こった。

本集会も多数の参加者により、盛会のうちに閉会した。徳島県医師会、徳島医学会事務局、ご参加・ご協力頂いた関係各位の皆様に感謝申し上げます、本報告を終えたい。



◆◆◆ 各賞受賞者 ◆◆◆

■ 第251回徳島医学会学術集会（平成27年8月2日）において、第35回徳島医学会賞及び第14回若手奨励賞の受賞者が選考されました。

第35回徳島医学会賞

西谷 真明（社会医療法人川島会川島病院泌尿器科）

「当院における光選択的前立腺蒸散術（PVP）の臨床的検討」

森本 佳奈（徳島大学大学院医歯薬学研究部血液・内分泌代謝内科学分野）

「2型糖尿病患者における血糖指標と減塩がもたらす血圧低下との関連」

山田眞一郎（徳島大学病院消化器・移植外科）

「肝細胞癌症例におけるNEK2発現の意識に関する検討」

第14回若手奨励賞受賞者

上村 宗範（徳島県立中央病院医学教育センター）

「関節リウマチに対するMTX治療中に高度の汎血球減少を来し死亡した5例の検討」

麻植れいか（徳島県立中央病院医学教育センター）

「非糖尿病性腎不全で維持透析施行中に急性発症1型糖尿病を発症した後期高齢者の1例」

梶田 敬介（徳島大学病院卒後臨床研修センター）

「PS不良ALK融合遺伝子陽性の若年肺腺癌に対しクリゾチニブが奏効した一例」

平成27年度 6年生OSCE成績優秀者

平成27年7月4日、臨床実習クリニカルクラークシップの総仕上げとして、6年生を対象としたAdvanced OSCEを実施しました。成績が特に優秀であった学生には、苛原医学部長より表彰状が授与されました。このような臨床技能試験を通して、臨床能力の向上が期待されます。



最優秀賞 川人 圭 祐

優秀賞 牧 秀則、菊池 高史、海古井由佳、松本 友里、遠藤ふうり
上田 浩之、小林まりや、大塚亮太郎、赤池 瑠子

部門賞(概略評価部門) 藤井 浩史、坂東 遼、増田さら良、本山明日香、磯田 洋

部門賞(評点評価部門) 保科 耀司、上原 明子、西 結奈、大浦 寛奈、畠田 昇一



第67回西日本医科学学生総合体育大会



サッカー部
優勝



柔道部
優勝

学遊抄 偶然と必然

機能解剖学分野 福井 義浩

大学に入学したのは1971年（昭和46年）の4月で学園紛争は収束しつつある時期であった。地元の津高校から大挙して三重県立大学医学部（翌年に、三重大学に移管）に入学したものの校舎は高校と変わりなく附属病院も新築中のため医学部に入学した実感はなかった。当時の医進課程（1年、2年）は専門課程と完全に切り離されており退屈な授業が延々と続いた。医学部に来て良かったと思えるようになったのは専門課程2年（4年次）、病理学が始まった頃である。無味乾燥な骨学実習を行いながら、こんなはずじゃなかったと何度も思ったものである。厭な科目は最低限の労力で、面白いと思った科目は一生懸命勉強する姿勢は6年間変わらなかった。

当時から続けている唯一の趣味はスキーである。初めてスキーを履いたのは信州白馬八方尾根スキー場であった。初日に風吹きのため山頂の山小屋で数時間閉じ込められ、無料のカレーライスを振る舞われたのも今となっては懐かしい思い出である。三重県は岐阜、信州のスキー場に比較的近く、冬休みと春休みには必ず乗鞍、白馬、野沢、戸狩、志賀高原、



大学の同級生と信州のグレンデで（右から2人目が筆者）

赤倉方面へ、週末には岐阜大日岳によく出かけた。最近はおまほら北海道へスキーに出かけている。また、同級生に関西、名古屋出身者が多く、週末には京都、大阪、名古屋にもよく遊びに出かけた。今も当時の仲間と



環研亀山義郎教授と志賀高原で（左端が筆者）

は時々会い、大阪、名古屋や伊勢で杯を重ねている。

生理学だけが興味の持てる唯一の科目であった3年次と異なり、4年次の最初の病理学の講義は新鮮で医学への興味が初めて湧いた。中久木和也助教授（その後、福井医大教授）にお願いして発がんや免疫に関する実験をさせて頂き、将来は病理学の研究者になりたいと卒業直前まで考えていた。元々生物系の研究者になりたいと考えて医学部に入学したので、病理解剖・病理診断がデューティーである病理学を一生専攻する決心がなかなかつかない。その時、卒業直前の我々の前に新任の山村英樹解剖学教授が現れて、「先天異常の研究をしたい人はいませんか」とおっしゃられた。卒後の進路を迷っていた私にとっては救世主の様に思われた。そして、解剖学教室の大学院生になった。その後、名大環境医学研究所助手（8年）を経て、香川医科大学解剖学助教授（3年）に、そして徳島大学に着任して23年経った。偶然の積み重ねの結果として今は解剖学教室に所属しているが、高校生の頃に希望した進路を最終的に叶えることができたのではないかと、今は思える。

白衣授与・Student Doctor 認定証授与式

医療教育学分野 赤池 雅史

平成27年3月13日、大塚講堂にて、保護者の皆様のご列席のもと、医学科4年生を対象に、白衣授与・Student Doctor 認定証授与式が行われました。第一部では苛原稔医学部長、安井夏生病院長からの激励のお言葉と実習生代表宣誓の後、学生全員に徳島大学病院のエンブレムが肩に刺繍された真新しい白衣とStudent Doctor 認定証が授与されました。第二部ではキャリア形成教育の一環として、安達知子先生（総合母子保健センター愛育病院 副院長・産科婦人科部長）、田中克哉先生（徳島大学大学院医歯薬学研究所 麻酔・疼痛治療医学分野教授）、森岡久尚先生（厚生労働省老健局老人保健課 課長補佐兼介護保険データ分析室長）の三名の先生方からご講演をたまわりました。

全国医学部長病院長会議では、臨床実習前教育で所定の成績を修め、共用試験医学系CBT（computer-based testing）による知識の評価で全国医学部・医科大学統一基準をクリアし、さらにOSCE（Objective Structured Clinical Examination；客



観的臨床能力試験）による技能・態度の評価に合格した医学生をStudent Doctorに認定しています。Student Doctor認定を受けた学生は、患者さんの同意を得た上で、指導医による指導のもとで診療チームの一員として役割を有しながら、クリニカル・クラークシップ（診療参加型臨床実習）を履修します。この制度は、医学生に医師を目指す者としての自覚を促すとともに、社会や患者さんに対して、臨床実習学生が一定レベルの知識と技量を有していることを示し、臨床実習へのご理解とご協力をお願いすることを目的としています。Student Doctorに認定された医学生が、知識・技能・態度のいずれにおいても優れた医師に成長していくことを期待したいと思います。

1 2 3 数字で見る医学部 7 8 9

◆ 入学試験（医学・栄養・保健）

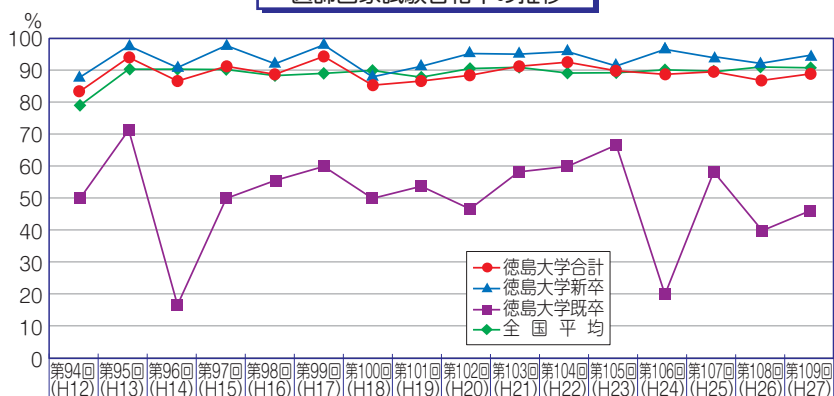
平成 27 年度 徳島大学医学部入学試験受験者・合格者数調・入学者数調

	定員	志願者	受験者	合格者数	入学者数	男	女	県内	県外	海外	現役	一浪	その他
医 学 科	114	704	399	* 115	114	71	43	29	85	0	40	49	25
医 科 栄 養 学 科	50	159	106	53	50	4	46	10	40	0	38	10	2
保 健 学 科	看 護	70	250	163	73	72	1	41	31	0	61	9	2
	放 射	37	148	107	39	37	28	5	32	0	27	5	5
	検 査	17	35	30	20	17	5	6	11	0	13	3	1

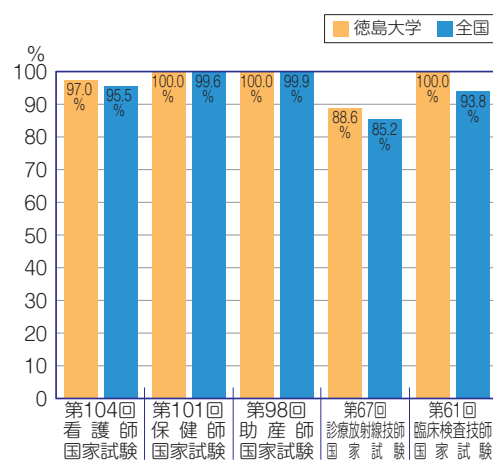
*入学手続き後、入学辞退者 1 名があったため追加合格者 1 名を出したことにより、合格者が 115 名となった。

◆ 国家試験

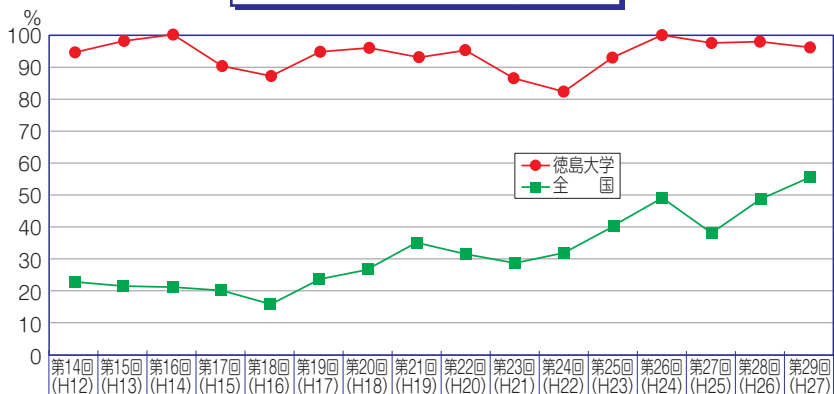
医師国家試験合格率の推移



保健学科 各種国家試験合格状況について



管理栄養士国家試験合格率の推移



◆ 科研費採択状況（医学部・病院の合計）

(平成 27 年 7 月 1 日現在)

研究種目名	平成 22 年度		平成 23 年度		平成 24 年度		平成 25 年度		平成 26 年度		平成 27 年度	
	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)
特定領域研究	2	8,600	1	4,800	0	0	0	0	0	0	0	0
基盤研究 A	1	11,500	0	0	0	0	0	0	1	8,200	1	11,700
基盤研究 B	19	92,600	19	78,900	18	80,700	16	68,200	19	74,600	16	65,000
基盤研究 C	78	82,400	87	108,800	90	109,200	96	113,100	92	111,700	97	120,400
挑戦の萌芽研究	11	18,200	23	32,800	25	31,400	22	27,800	16	21,200	17	22,600
若手研究 (S)	1	14,400	1	14,400	1	12,800						
若手研究 (A)	4	19,100	3	19,500	3	11,500	1	5,400	3	20,300	3	14,700
若手研究 (B)	47	69,400	51	66,600	50	77,100	56	79,500	44	57,500	53	74,400
研究活動スタート支援	1	950	2	2,600	8	9,500	7	7,700	7	7,500	3	3,200
新学術領域研究	2	28,200	6	42,400	6	43,900	5	19,500	4	14,200	1	10,900
特別研究促進費	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
特別研究員奨励費	5	3,500	4	2,800	3	2,700	2	1,800	2	1,900	2	1,700
合 計	171	348,850	197	373,600	204	378,800	205	323,000	188	317,100	193	324,600

*若手研究 (S) については、平成 22 年度より新規募集は行われていない。

新任教職員あいさつ



細胞生物学分野(旧生理機能学分野) 教授 米村 重信

平成27年4月1日付けで細胞生物学分野教授に就任いたしました米村重信と申します。神戸出身、東京育ち、東京大学理学部生物学科(動物学)を昭和58年に卒業しました。東京大学大学院理学系研究科生物化学専攻で理学博士を取得、学振特別研究員を経て、アメリカジョージア

ホプキンス大でのポストドクとなり、愛知県岡崎の生理学研究所の助手、京都大学医学部での助手、講師を勤めました。さらに西に進んで平成13年に神戸の理化学研究所発生・再生科学総合研究センターに異動し、PIとして独立しました。上皮細胞の形態形成、極性形成に興味を持ち、光学顕微鏡、電子顕微

鏡レベルの形態学をベースに、分子レベルでメカノセンシングの機構を突き止め細胞レベルで検証するなどの細胞生物学的手法で研究に取り組んでおります。理化学研究所に研究環境の良さがある一方、大学のような学生の入れ替わりなどがなく、人の成長に関わることに強い魅力を感じ、淡路島を越えて徳島大学に赴任することになりました。医学部における基礎的な生物学の講義から、学生には生命に対する深い興味や、疑問、問題を解決するための方法などを身につけてほしいと思います。研究室においては新しい流れを作るような独創性を大切にしていきたいです。知ろう四国、走ろう四国を合言葉にランニングも楽しんでいきたいと思ひます。どうぞ宜しくお願い致します。



医用理工学分野 教授 森田 明典

平成27年4月1日付けで医用理工学分野教授を拝命いたしました。私は千葉県出身で、平成8年に東京理科大学理工学部応用生物科学科を卒業後、東京大学大学院理学系研究科生物化学専攻に進学し、平成13年に学位を取得しました。その後、同大大学院医学系研究科量子環境医学分

野、東京理科大学理工学部、広島大学原爆放射線医科学研究所において放射線生物学の研究、教育に従事し、平成25年に本学大学院放射線基礎科学分野准教授として本学に着任いたしました。私は大学院在籍時から放射線誘発アポトーシスの機構解明、およびそれを利用した放射線防護剤の開発研究に

一貫して取り組み、その研究過程で放射線に対する細胞の初期応答を担う分子を標的とすることで放射線防護効果が得られることを発見しました。このような分子標的薬による放射線防護は、被ばく事故における救命だけでなく、放射線治療において正常組織の耐容線量を高める選択的防護剤としての応用も期待されています。放射線科学における放射線生物学の重要性は、今後、特に治療の分野においてますます重要性を増してくるものと確信しています。放射線生物学研究で得られた知見が本格的に治療に応用されるこれからの時代に、微力ながら貢献できるよう研究および人材育成に取り組んでまいりたいと思ひます。今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。



医歯薬事務部長 川上 哲

医学部の先生方、学生の皆さん、毎日、お疲れ様です。私達事務職員は、先生方の教育・研究並びに学生さんの学生生活の支援を担当するとともに、学部長のもとで医学部の管理運営事務を担当していますので、どうかよろしくお願ひいたします。最近、全人的医療という言葉をよく

耳にします。学生の皆さんには、釈迦に説法かも知れませんが、患者さんも十人十色です。それぞれに合った適切な医療を行うためには、患者さんが何を考え、何を望んでいるのか、まず患者さんをよく知ること、心が通じ合うことから

始まるんじゃないでしょうか。確かに、医療行為には高度な専門的知識やスキルが必要ですが、その土台となる幅広い知識や教養、常識を身につけることも必要です。そしてこれらは、患者さんとのコミュニケーションに大いにプラスになります。「これは役に立つ、あれは役に立たない」ではなく、何からでも学ぶべきもの、得るべきものがあると思ひますので、是非、皆さん自身の人間力を高めるようにしてください。それが、皆さんにとって何よりも必要な「医療マインド」につながっていきます。病氣と向き合うことはもちろんですが、患者さんと向き合うことを大切にする、そんな医療人になってほしいと願っています。

新任准教授紹介

異動年月日	異動内容	氏名	所属	異動年月日	異動内容	氏名	所属
H27. 4. 1	昇任	橋本 浩子	子どもの保健・看護学	H27. 6. 1	昇任	坂田ひろみ	機能解剖学
H27. 5. 1	採用	河野 理	放射線理工学	H27. 10. 1	昇任	志内 哲也	統合生理学



徳島大学は、学校教育法第109条第2項の規定による「大学機関別認証評価」を受け、「大学評価基準を満たしている」と認定されました。
(平成26年3月26日)

- 認定評価機関
独立行政法人大学評価・学位授与機構
- 認証期間 7年間
(平成26年4月1日～平成33年3月31日)

編集後記



海外や国内の学会に行くとFacebookなどでやり取りしている人が多く見られます。SNS (Social Network Service) は2003年頃、アメリカで始まり、IT社会におけるコミュニケーション方法の象徴のように言われますが、反面、批判されたり、無理な交流を求められたりすることがある経験を持つ医師は、4%程度いるそうです。Harvard大学医学部長は投稿内容が「本人の将来に悪い結果をもたらすことがある。」と述べ、Drexel大学医学部では「卒後研修の応募費用に影響を及ぼす。」と警告しています。データ分析技術の進歩で、SNSの内容により、人間性が事前評価できる時代になりました。そこには「文字で表現されたもう一人の自分」が存在することを覚えておくべきでしょう。「相手の目を見ながら心を通わせる」ことがコミュニケーションの基本です。
(森口博基)

発行 徳島大学医学部 編集 医学部広報委員会
広報委員 森口博基(委員長)、安友康二、赤池雅史、西村匡司、酒井 徹、大塚秀樹、川上 哲

本誌へのご意見・ご要望は、(総務係)E-mail: isysoumu1k@tokushima-u.ac.jp までお願いします。
なお、写真は執筆者各位の提供により掲載しています。

Tel: 088-633-9116 Fax: 088-633-9028 URL <http://www.tokushima-u.ac.jp/med/>